

現代福祉学部国内研修 岩手県（2023年8月5日～8月8日）

陸前高田に向かうため、東京駅から一ノ関駅までは東北新幹線、一ノ関から陸前高田まではタクシーで移動。現地到着後、初めて訪れる被災地の姿に言葉では言い表せない思いを抱いた。

2011年の東日本大震災により陸前高田は中心市街地の全てを失い、震災によって1800人が犠牲となった。震災から12年経過したが、当時、小学2年生で山口県にいた僕にとっては現実味のない、遠い場所での出来事だった。しかし、何度もテレビやネットで被災地の状況や復興の道のりを見ており、震災のことを少しは理解していると思っていたが、実際には全くそうではなかった。

陸前高田は12年を経た今でも自分が思っていたほど復興が進んでいるとは思えなかった。被災した地域には建物はあまりなく、道路はきれいに舗装されているものの、道の両脇には盛り土の山が広がっていた。僕にとって一番の衝撃的な景色は、何十メートルに渡りそびえ立つ巨大な防波堤だった。そこに見えていただろう陸前高田の海岸や港の景色はまったく見えず、それほどまでの防波堤を作らなくてはならないほどの津波だったのだと思うと身震いがした。百聞は一見にしかず。テレビの向こう側ではないリアルな空気を感じた瞬間だった。

また、奇跡の一本松として有名な高田松原の松の木を見ることができた。震災でなくなった松の木は、新たな苗木での再生が進み、大きく成長し始めていた。また唯一残った奇跡の一本松は現在、レプリカの状態できれいに立っていた。しかし、そのすぐ側には震災前にユースホテルだった建物が折れ曲がったまま残されており、震災の悲惨な爪痕がそこにあった。

夜はこの研修の企画者である梅木君の祖父母のお宅で震災時の話を聞き、陸前高田の海鮮でBBQをしていただいた。2011年の震災の日、梅木君のお祖父さんは市街地にいて津波に襲われている。その時に必死で高台に逃げた話を聞いたのだが、正直、岩手弁が強すぎて理解するのに苦労した。ここで僕は改めて、日本各地には多数の方言が存在し、方言相互の間では意思の疎通に支障があるのだと言うことを認識した。結局この問題は梅木君が通訳になることで解決した。話は戻り、震災の日、お祖父さんが市街地にいたことを知っていた家族は、お祖父さんが津波に襲われて死んでしまったと思ったそうだ。途方に暮れて祖父母の自宅に行ってみると、そこには自宅に戻り、何事も無かったように食事をしているお祖父さんが...この話を聞き、全員大爆笑。この日一番の笑い声が響いた。この笑いは、お祖父さんが無事だったからこそその笑いであり、あの震災の日、無事で良かった

と笑顔になれた人の方が圧倒的に少なかっただろう現実。そんな思いがよぎった夜となった。

陸前高田は2019年7月1日に持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けた優れた取り組みを提案した自治体の一つとして「SDGs 未来都市」に選定されている。持続可能なまちというと、定住人口を増やすことを連想するが、実際、陸前高田の人口は震災以降減少している。陸前高田は国からの復興支援等により、まずは人の命を守るための防波堤や、土地の嵩上げを行った。しかし市街地の復興に掛かる頃には人口は流失、定住人口を増やすことは至難の業だ。そこで、市としては、日本中、世界中の方々に陸前高田市を知ってもらい、交流人口を増やすところから実現させていきたいと考えているようだ。震災前、陸前高田は観光の場所であった。そこには震災前の美しかった松並木や白浜の景色はない。しかし、今は奇跡の一本松を囲むように「高田松原津波復興祈念公園」が整備され、「東日本大震災津波伝承館」や「道の駅 高田松原」が併設されている。将来的には松並木も復活し、たくさんの人々が訪れる観光の場所として復活するはずだし、震災から復興を続けている災害や防災が学べる場所として重要な役割を果たせる場所だと感じた。

翌日はいよいよ自分の専門分野である人と馬の共存を学ぶために遠野市を訪問した。遠野市は、古くは「南部駒の産地」として隆盛を誇り、近年は農用馬及び乗用馬の県内でも有数の馬産地である。実は僕が山口県で騎乗している馬の「リベルタ」は遠野で生産された日本スポーツホース種である。知らない人が多いが、遠野生まれの馬にはお尻に「と」のマークがあり、これを見れば遠野出身とすることが分かる。その様な縁もあり、遠野への訪問は楽しみで仕方なかった。まずは「社団法人馬搬振興会」の岩間氏を訪ね、「馬搬」について話を伺うと共に、実際に馬搬体験をさせていただいた。

馬搬とは、山で伐りだした木材を馬で運搬することであり、馬は重機の入らない狭い場所まで行くことができ、山を削って重機を入れる必要もないのでCO2も排出せず環境にも優しい運搬技術である。今回の訪問が決まるまで、馬搬が今でも存在することを知らなかったが、実際に馬力で仕事をする光景を見て、その技術と過酷さに驚愕した。まず馬搬に使う馬は「ばん馬」など、体躯の大きい馬でないといけない。競馬や乗馬として使われるサラブレッドを使うは可能か聞いてみたが、サラブレッドを使うならそれなりの技術や訓練が必要だとの答えだった。

参加者の中で日頃から馬に携わっているのは僕だけなので、僕が代表して馬搬を体験させていただくことになった。馬を操ることにはある程度自信はあったが、その思いはすぐに打ち砕かれた。まず、馬に引き手綱をつけ、

丸太を結ぶそりや馬とそりを繋ぐ器具などをつけると重さは1トン近くにもなる。その馬を左右に行かせたり、止まれの指示を出したりするのは至難の業だった。しかも勾配のある山の斜面での仕事。一つ間違えると、自分自身だけでなく、馬と一緒に大けがをする可能性もある。実際に馬を動かしながら斜面をすべってヒヤリとした。岩間氏のサポートがあったからできた体験であった。

馬搬のメリットとして、機械が使えない場所でも作業できたり、急傾斜地にも対応できたりと、搬出が難しい現場からの搬出が可能である。しかしながら、人や馬の訓練が必要で、簡単に従事できる仕事ではないと言うデメリットもあることも分かった。人馬の疲労や体調も仕事の効率を左右する。これらは僕自身が身をもって体験している。

岩間氏は、馬搬は仕事としてだけでなく、馬搬文化と技術の継承や宣伝、普及を目的として活動していると言われた。その高い志に、同じ馬と関わる活動をする自分に何かを問いかけられている気がした。

その後、高清水高原牧場を訪問させていただいたが、800頭の馬が放牧されている光景は圧巻だった。広い牧場に牛などもおり、動物にストレスフリーな環境が広がった馬たちにとってのパラダイスがそこに広がっていた。

引退競走馬を引き取っておられるご家庭への訪問では引き続き岩間氏にお話を伺い、改めて引退競走馬の行く末に思いを巡らせた。法政大学馬術部では現在、引退競走馬を中心に馬術部の乗馬としている。JRAでも引退競走馬を取り巻く環境の改善や向上に動いており、「引退競走馬のセカンドキャリア促進支援」を始めている。しかしながら、引退競走馬としてセカンドキャリアを迎えることが出来る馬はまだ僅かだ。今回の訪問で、馬に関わる生活を毎日を送る僕に出来ることは何かを強く考えさせられた。今の僕に出来ることは限られているが、引退競走馬を再調教し、その馬が乗馬として活躍できるように調教の腕を上げていきたいと改めて思った。また、知らなかった馬術以外での馬との共存の世界をもっと探求していきたいと考えている。人と馬が共存共栄できる世界を実現する一端を担えるように。